

# おじさんの青春日記

その4



田舎屋

## 新しい年明けの「ごあいさつ」を申し上げます。

西暦二〇一〇年の新春、「おじさんの青春日記 その4」をお届けいたします。

手もとにある歴史辞典「日本全史」（講談社）をめぐってみました。

今から一〇〇年前の日本。時は平安時代、年号は長保二年（西暦一〇一〇年）となっています。

左大臣、藤原道長が宮廷のなかで権勢をふるい、その幼娘、彰子を強引に中宮（皇后に準じる位）として一条天皇のもとに送り出しています。

その二年後、中宮、彰子に仕える才媛、紫式部によって、日本文学史上不朽の名作、全五帖におよぶ長編傑作「源氏物語」の一部が完成しています。

「源氏物語」が書かれた時代からさらに一〇〇年遡（さかのぼ）ると、当時の日本は青銅器から鉄器へ移行する弥生時代のまっただなか。遺蹟から発掘される遺物以外、文字記録も無い時代となります。

そして今から一〇〇年先の未来、我々の子孫がもし生存しているとするとするならば、彼らはどうのような情景を目にしているのでしょうか。

私が卒業した小学校は原子爆弾の爆心地にもつとも近い小学校。児童、職員が多くが被爆死し、校舎全体が慰霊碑のようなたたずまいでした。新しい憲法のもと、学校では低学年の頃から原爆・平和図書の読書活動や、文章表現の教育が熱心に行なわれていました。

その頃、姉に読んでもらった『人間の条件』（五味川純平 著）は、今もその衝撃的なラストシーンが脳裏に刻みこまれています。

高校生の時、初めて長文の執筆に挑戦し、亡父の七回忌を機に当時四千元の予算で自費出版した父の追想録、『道標』が親戚や父の友人達の間で評判になり、激励の手紙とともに思いがけなく寄せられた多額のカンパで、にわか成り金になった喜びを憶えています。

ちょうど二十歳の秋。懸賞論文の賞品として体験したアメリカ合衆国への旅では、私の後半生に影響を与え続ける幾多の興奮を味わいました。

三十代も半ばになって再び携わることが出来た著作。日々の生活の折々で出会った多くの人たちの情念や歴史を、長い月日をかけて数行ずつワープロに書き綴っていく作業は、憂鬱を忘れさせてくれる珠玉のひとつとまで思いました。

作品のなかに紹介した多くの人々。彼らのほとんどは私にとって文字を通じて得ることの出来た、血縁同様の存在でもあります。

英文対訳付きで出版し、日本とアメリカで発売された『カリパトリアへの手紙』（丸善）のなかのサンディ・ジョージ、パスクアラ・マルケス。瞑想的な二人のアメリカ人の眼差（まなざ）しは今も強く印象に残っています。

『ものを造るといふこと』の私の父、里吉寅一、九州・長崎の森理髪館店主、理容器具商の濱屋重二郎社長。『スーパースター』の矢沢永吉さん、ゴンちゃん。

『小説 操子』のミサコこと新田操子さん、道原君こと仏原和義さん、エミリオ・デラルソ。『無言館』の窪島誠一郎館長、学徒出陣した多くの画学生たち。

『岡ちゃんに捧げる詩』の岡賢治さん、彼のお母さん。

『追録 ハリータケオモミタ』の榎田武雄さん、慶徳成美さん。

『合衆国陸軍軍曹 マスタダズオ』の増田和男さん、その妹、メアリー増田さん、日系人兵士たち、ロナルド・レーガン元米合衆国大統領、イタリア・アンツイオ上陸記念博物館のパトリツイオ・コランツイオノ館長

『恩師 佐藤はじめ先生』の佐藤先生こと鈴木肇さん、歌人・吉野秀雄さん。  
『お好み焼き 風月』の二神敏郎さん、田村祐一郎さん、二神さんのお母さん。  
『清職』にある祖母、尾田千工、山本巖さん、停年間近の銀行支店長。  
そして今回の「おじさんの青春日記 その4」、『オペラ 夕鶴』の団伊玖磨さん、的川幾子さん。『ふるさと』の李浩麗さん、家子新太郎さん。  
こうして抜き出してみると実に多様多種。ジャンル、国籍を超えた人々とのさまざまな出会いと別れを繰り返したことに驚きます。舞台となった土地は北海道から九州、国内はもとより、イタリア、アメリカ合衆国、東南アジアにおよびます。  
仕事の合間のわずかな時間を盗んでの取材、ホテルや車中での執筆でしたが、ビジネスの結果はともかく、文中に登場する人たちとの遭遇がどれだけ私の活力と好奇心を促し、結果として実り多い思索の機会を与えてくれたことか。  
それにひきかえ、彼らの生きた、あるいは生きる姿を、私の筆力では到底描き切れないもどかしさを幾度も味わいました。  
そしてまた今気づくことは、彼ら登場人物のほとんどが日本や世界じゅうの人々が味わった「戦争」の惨禍と切り離せない存在であること。本人やその肉親、親族、友人の多くが、戦争を境に不本意にその人生を変えられた人たちであること。  
千年の歴史を緋（ひもと）く今、我々は戦争と戦争の狭間（はざま）にあやうく生きていくことに気付きませす。

私の著述を応援してくださった方々に、この稿を借りてあらためてお礼を申し上げます。資料や文献の収集に献身的な協力をして頂いた方々、通訳や翻訳者、外国でのコーディネート、軽妙なイラストを提供してくださったデザイナー、報道関係者、官公庁の方々、助言とともに貴重な資料や題材を提供してくださった読者、同級生たち、手厳しい批評家だった母、家族、そして「物好きな社長の道楽」を寛容に黙認してくれる社員へ。  
とりわけ『おじさんの青春日記』を編集し始めてからは、応援して下さる方たちや登場人物との交流を通して、ふたたび血気盛んな青春を謳歌しているような気分を味わせていただきました。  
また、『おじさんの青春日記』所収の作品が、文中に登場する人たち同士を結縁させる、魂の交差点となったことは著者にとって図らざる喜びでありました。  
これからも社会の一遇で眼を凝らして、思いのたけを発信し続けていきたいと思っています。

西暦二〇二〇年の新春。敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々にこうして『おじさんの青春日記 その4』をお送り出来たことに感謝いたします。  
ご健康をお祈り申し上げます。

里吉賢司

二〇二〇年（平成三十二年） 元旦

# おじさんの青春日記

## その4

ほくらのお祖父さんの時代。明治の頃です。

三歩さがって父の影を踏まず。家長である父親はいつも上座に座って一番風呂。五衛門風呂の火を守るのは子供たちの仕事でした。尊い父親のフンドシと、女子供の腰巻、襦袢を同じ物干し竿に干すなどもってのほか。男子の沽券（コカシ）にかかわる一大事でした。

ところが、どうです、時うつって世紀末の現代。父親の精密にして神秘なる器官を守護たてまつるパンツと、破廉恥にも局所をわずかT状のヒモにて覆うのみの下帯とをあわせ洗濯したとかで、年端もいかぬ娘ども不平苦情の限り尽くす。

たしなめるべき母親は、抗菌ナントカの薬物を用いてもっぱら屋敷内、殺菌・消臭三昧（ざんまい）。

おじさんはゴキブリではないぞ。バイキンではないぞ。こんなことしてるから、北朝鮮にナメられて、

日本めがけてミサイルが飛んでくる。

男子国民の牙（きば）が抜かれたとき、国家、文明が衰退することは古今の歴史に明らかである。

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の孤独なおじさんに贈る、

「おじさんの青春日記 その4」。

書き手

里吉 賢司

# おじさんの青春日記（その4）

## 目次

オペラ 夕鶴

「阪神・淡路大震災」  
神戸市立本山第三小学校にて  
ふるさと

おじさんの青春日記 ～その4～

オ
ペ
ラ
夕
鶴

「やあ、久しぶりですわね」  
ホテルのロビーで声をかけられた。  
数年ぶりに出会う、旧知の雑誌編集者だった。  
彼の後に眼鏡をかけた老人が二人の立ち話が終わるのを待って、手持ち無沙汰にたたずんでいる。

「そうそう、音楽、お好きでしたよね」  
と、編集者。

「ええ、そうですよ」

「ちよつどいい。めずらしい方をご紹介しますよ」

編集者はそう言って、老人に歩み寄って何事かささやいた。老人が鷹揚にうなずくのが見えた。

「こちらは、作曲家の団伊玖磨先生。ご存じですよ。今、私の雑誌に随筆の連載をお願いしてるんですよ」

と編集者が、その老人を私に紹介した。

作曲家、団伊玖磨。

知らぬはずがない。

ちよつど昼どきということもあって、編集者に誘われるままホテルのレストランで昼食を一緒に、ということになった。

中学生の頃から私は、父の遺品のポータブルのステレオセットで毎日深夜までレコードを聞きあさっていた。ドーナツ盤と呼ばれていたドーナツの形をしたレコード。三十センチほどもあるLP。それぞれレコードの回転数が異なっていて、プレイヤーの先端についたダイヤモンドの針から音を拾うものだった。

父が死の直前まで枕もとから離さなかった箏曲「千鳥」、「春の海」、「瀬音」など宮城道夫の箏曲全集。姉たちのコレクションであるポールアンカ、ナットキングコール、ハリベラフオンテなどの歌。ペレス・ブラドやグレンミラーなどのバンド曲。カーメンキャバレットの流麗なピアノ。そして石原裕次郎、バツハ、ブラームス。手あたり次第にさまざまなジャンルの音楽を深夜まで聴きふけていた。

その時代、音楽大学を出たての指揮者、小沢征爾さんが世界の音楽界に華々しくデビューしていた頃。日本から単身スクーターを駆って陸路フランスにたどり着き、ブザンソンの国際指揮者コンクールでグランプリを獲得するまでの小沢氏の冒険記、「僕の音楽武者修業」という本を私は快哉を叫びながら何度も読み返していた。

高校生になったある日、学校帰りに寄り道したレコード店で見つけたオペラ「夕鶴」のレコードがどうしても欲しくなつて、母にねだつて買ってもらった。

のどかだった当時。私が学校帰りに通っていたレコード店は、店員さんに頼めば重厚なデザインのもの、見るからに高級そうな店内の舶来アンプとスピーカーでレコードを長いあいだ聴かせてくれていた。時によるといかにも年季の入った趣味人という感じの店主が店先に現れ、紅茶やお菓子すすめながらクラシック音楽の蘊蓄(うんちく)を長々と聞かせてくれることがあった。

演奏時間一時間五十分にもなる大曲、オペラ「夕鶴」はLPの二枚組になっていて、雪のなかにひっそりとたたずむ山間の小さな農家が厚手のジャケットにデザインされていた。

木下順二原作の戯曲「夕鶴」はストーリー、台詞ともに原作のまま、当時二十八歳、新進気鋭の作曲家、団伊玖磨によって曲がつけられ全一幕のオペラとして完成した。

一九五二年(昭和二十七年)、大阪・朝日会館で団伊玖磨みずからの指揮で初演されたオペラ「夕鶴」は、当時の音楽界にセンセーションをもたらした。

太平洋戦争での惨憺たる敗北、空襲によつて廃墟と化した日本の主要都市、進駐軍による占領統治など、日本国民全体があらゆる分野で心身喪失の状態にあった当時、ヨーロッパの古典翻訳オペラではなく、日本人作曲家による日本語によるオペラ「夕鶴」が当時の日本の多くの音楽愛好家に深い感動と勇気をもたらしたことは想像に余りある。

一九二四年（大正一三年）東京都に生まれた団伊玖磨は、東京音楽学校を卒業した直後から作曲家への道を進んだ。NHK専属の作曲家として劇音楽などの作曲にたずさわるとともに、団氏が世に出るきっかけとなった「交響曲第一番イ長調」などの大作の創作に意欲的に取り組んだ。

昭和二六年完成したオペラ「夕鶴」は数々の音楽賞を受賞し、初演から今日までの上演回数は五百回を超えている。団氏は作曲、指揮活動のほかに、目まぐるしく駆け巡る国内、国外への旅のなかで書かれた随筆集「パイプのけむり」の随筆家としても知られており、日本音楽界の長老として日本芸術院会員に列せられている。

「夕鶴」は民話「鶴の恩返し」をもとに、木下順二が戯曲化したものである。

山中の一軒家に「与ひょう」という青年がひとり住んでいた。あるとき、与ひょうが矢が刺さつて苦しんでいる鶴を助けたところ、幾日かして美しい女「つう」が女房にしてくれと与ひょうのもとにやつてくる。

つうは、与ひょうのために鶴の千羽織という世にも美しい布を織った。その布は町で売ると一枚十両もの値で売れた。

隣村の「惣ど」と「運ず」は、この千羽織でひと儲けしようと与ひょうをそそのかす。つうは何枚もの布を織らせ、それを都で千両で売ろうという魂胆だった。

つうは彼らに言いなりになる与ひょうに不安をつのらせながら、もう一枚だけ布を織るところにする。ただし、機（はた）を織るところは決してのぞき見しないように、と念押しして。

ところが与ひょうは誘惑に負けて、ついに機屋をのぞいてしまう。そこにはみずからの体の羽根を抜きながら一心に機を織る一羽の鶴がいた。

機屋から出てきたつうはすっかりやつれ、二枚の布を手にしている。一緒に都へ行こうと喜ぶ与ひょう。しかしつうは、一枚の布だけは与ひょうのもとに大切に残しておいて、と言いつつ空へ帰っていく。

団伊玖磨指揮による大阪での初演から十四年ののち、オペラ「夕鶴」のLPレコードを手に入れた高校生の私は、毎夜そのレコードを繰り返し、繰り返し聴きふけた。

主役の「つう」はソプラノの三宅春恵、「与ひょう」に木下保、「運ず」に立川澄人、「惣ど」に秋元雅一朗。東京フィルハーモニー交響楽団による管弦楽、作曲の団伊玖磨氏自身による指揮である。

荘重な冒頭の導入オーケストラのあとに、子供たちの歌う童歌（わらべうた）が聞こえてくる。

仲間にかさされて、金への執着にとらわれていく与ひょうの姿を悲しむつうの歌うアリア『私の大事な与ひょう』。与ひょうへ思いを残しながら大空へ還るつうが、与ひょうに別れを告げる『別れのアリア』。

与ひよう、わたしの大事な与ひよう。あなたはどうしたの？  
あなたはだんだん変わっていく。変わっていく。  
わたしとは違う世界の人になっていってしまう。  
いつかわたしを私を矢で射たような、あの恐ろしい人たちと  
同じになっていってしまう。

どうしたの？ あなたは。どうすればいいの？ わたしは。  
わたしは、わたしは、どうすればいいの？

あなたはわたしの命を助けてくれた。

何の報いも望まないで、矢を抜いてくれた。

それがほんとうにうれしかったから、わたしはあなたのところへきたのよ。  
そして、あの布を織ってあげたら、あなたは子供のように喜んでくれた。

だから私は苦しいのに、何枚も何枚も織ってあげたのよ。

それをあなたはそのたびに、お金と取り替えてきたのね。

それでもいいわ、わたしは、あなたが好きなのなら。

だからお金が入ったから、あとはあなたと二人きりで

この小さな家のなかで、静かに、楽しく暮らしたいのよ。

あなたは他の人とはちがう人。わたしの世界の人。

なのにあんたは、だんだん離れていく。だんだん遠くなっていく。

どうしたの？ あなたは。どうすればいいの？ わたしは。

わたしは、わたしは、どうすればいいの？

アリア『わたしの大事な与ひよう』

日本語のセリフに従って曲づけされた歌曲の旋律は、歌詞と音律が相互に調和して、日本語のもつ独特の情感をいっそう際立たせていた。

日本中世の定型詩のような独特のリズムをもつ歌詞と、伝統的な和声とが渾然（こんぜん）となった雅びな響きが私の心をうつた。時代も判然としない幻想の時のなかで、なにか懐かしいものにめぐりあえたような安らぎがあった。

高校生の私はそれらの歌曲のほとんどを諳（そらん）じて歌えるほどになっていた。

日本の敗戦からの復活を高らかに謳う、東京オリンピックが開催された頃のことであった。

成長にしたがって私は、アサヒグラフに連載されていた随筆集「パイプのけむり」や、団伊玖磨氏の著作のいくつかを読むようになった。

団氏が四歳の時から書き続けられている「パイプのけむり」は氏の縦横無尽な博識と、国内外の旅で得た体験をつづる名エッセイといわれている。

しかし初期の著作はともかく、回を追って九十年代近年の「パイプのけむり」の章にいたると、随所に大衆庶民を膝下に睥睨（へいげい）するような氏の貴族趣味的、権威主義的な匂いが読みとれて不快に感じるがあった。

日本芸術院会員として、また数代に遡（さかのぼ）る日本上流社会の一員として、海外に旅をすれば在外公館に駐在する大使が出迎え、旅先で手厚い保護を受ける。現地の高位、高官たちとのきらびやかな交際。いつころからか権威の衣をまとった創作活動を続けて、加齢とともに鋭角的な感性も前衛も減衰した音楽家の旅日記に私はほとんど興味を失ってしまった。

かつて、瑞々（みずみず）しい旋律で青年期の私をとらえて離さず、そのアリアを諳（そらん）じるほど心酔させた音楽家の叙情とオリジナリティを、その後の氏の曲や文章のなかに感じとることは出来なかった。

初演から五十年を経て今あらためて聴くオペラ「夕鶴」は、つうが与ひように歌いかけたアリアが象徴するように、私にとって今もなお輝きを失っていないばかりか、現代にあってもいっそう普遍の光を増しているように感じる。

さておき。

思いがけず団伊玖磨氏と昼食をとにもすることとなった私は、ホテルのレストランに入

た。私が氏の代表作であるオペラ「夕鶴」のファンであったことに加え、青年期に購入したそのレコードを今も大切に保存していることを聞いた老作曲家は大仰に驚いてみせ、食事のあいだじゅう終始上機嫌であった。

コーヒーが運ばれる頃、人間の運命ということに話題が移り、団氏は古いエピソードを披露してくれた。

「フィリピンの、或るリゾートホテルのプールサイドでの出来事なんです」

と氏は語り始めた。

「プールサイドのデッキチェアで私はウトウトうたた寝をしていましたねえ。そこへターバンを巻いたインド人が私の前を通りがかって、私の顔をじつと覗きこむんです。

どうやら占い師のようなんです。

『お前の父親がおじいさんは事故に遭って、血まみれになって死んでいったらう？

どうか、違うか？』

って、言うんですよ。

私は初めのうち、その占い師が言いがかりをつけて、私からチップでも掠め取ろうとしているじゃないかって疑いました。

でもそのホテルはそれなりの格式のあるホテルでしてねえ。宿泊客以外の一般人が容易に入れるようなところじゃあない。

私の疑念を見透かしたのか、そのインド人は、

『私は金をもらおうとしてお前にこんなことを言ってるんじゃない。私は金には興味はない』

と端然として言い放ちます。

そしてそのインド人は、

『お前も、血まみれになつて死んでいくだらう』

って、不吉なことを言うんです。要するに畳の上では死ねず、事故に遭って死ぬ、と私に向かつて予言するんですよ。

『なぜ、そんなこと、言うんだ？』

って私は問い返しました。

『おまえの顔にお前の未来が見える』

と、インド人。

私には心あたりがあつたんです。私の祖父は、昭和の初めに暴漢にピストルで射殺されているんです。血まみれになつて」。

一九三二年（昭和七年）三月、三井財閥の指導者である三井合名理事長、男爵、団琢磨（だん たくま）は東京日本橋・三井銀行本館前で血盟団員、菱沼五郎の放つた銃弾によつて射殺された。当時七五歳であつた。

第一次大戦後、大正から昭和へと元号の改まつた日本では未曾有の農村不況により、東北地方で娘を身売りするなど極貧の状況が続出した。金融大恐慌に続く労働争議の頻発と当局による弾圧、失業者の増大と左翼勢力の活動、そしてこの時代の国政を担うべき政治家たちによる疑獄事件が相次いだ。これらの社会背景が血盟団員を急速に過激な「国家革新」に向かわせた。

彼らは当時の国家指導者を「一人一殺」するテロ活動に臨んだのである。団琢磨が襲われた一月前には前大蔵大臣、井上準之助が同じく血盟団員、小沼正によつて射殺されている。

事件直後、世論はテロ活動を強く非難したが、事件の公判が始まつて被告たちの動機や経緯が次々に明らかになるにつれ、国民のあいだから被告たちへの同情と支持が澎湃（ほうはい）と沸き起こつた。

団琢磨暗殺事件ののち昭和七年五月一日、犬養毅首相が海軍士官に射殺されたいわゆる五・一五事件は、この血盟団事件の延長にある。

農村の疲弊、金融恐慌、不況、軍人の台頭、そしてファシズムが日本を近隣諸国領土への侵略に向かわせ、十余年後の破滅的な敗戦へと時代を刻んでいった。

その敗戦の六年後にして、団琢磨の孫、団伊玖磨によつて作曲されたオペラ「夕鶴」が発表されたのである。

団伊玖磨の父、団伊能は勅選の貴族院議員、戦後の参議院議員を経た財界人。

団家は三代にわたつて明治時代から現代に至るまで、日本の歴史の表舞台に深く関わり続けている。

ホテルのレストランで、団氏は続ける。

「私はそのインド人に私の祖父の遭難事件を話したんです。そうしたら彼は、

『俺はそんなこと、とうにわかつている』

とばかり、特別驚いた表情も見せません。

私は彼に言つたんです。

『君の予言はわかつた。でも私は血まみれになつて死ぬことなぞイヤだ。君が本当に予言する能力があるなら、どうすればそういう事態を避けることが出来るのか分かるだろう？。教えてくれないか、その手だてはないのか？』と。

そうしたら彼は、しばらく黙りこんだのち私に言いました。

『なにか赤いものを離さず身につけるのがよい。たとえば、ハンカチ、ネクタイ。なんでもいいから、赤色のものを肌身離さず身につけてさえいれば、お前は難を逃れることができる』

と言ひ残して、私の前から悠然と立ち去つたのです」

私と同席の編集者は思わず顔を見合わせて、団氏にそれから後のことを尋ねた。

「そのインド人に会つてからというもの、私はほらこの通り、赤い布切れをいつもポケットに忍ばせているんです」

と、団氏は白いワイシャツの胸ポケットからマツチ箱ほどの大きさの深紅のシルクの布を取り出して、私たち二人にかざしてみせた。

\*

一人の音楽家の死を思い出す。

一九九一年（平成三年）春。私の執筆したノンフィクション作品「追録 ハリータケオモミタ」がテレビ局によって、ドキュメンタリー番組『世界一の国旗掲揚台を建てた男』として制作されることになり、私は現地ロケのためにテレビ局のクルーと共にアメリカ・カリフォルニア州へ渡ることになった。

一九〇八年（明治四十一年）、一人の移民者として日本からアメリカに渡り、戦前、戦中、戦後、幾多の辛苦を乗り越えて、アメリカ市民とともにカリフォルニア州カリパトリア市に世界一高いフラッグポール（国旗掲揚台）を建立した広島県出身の日本人、ハリータケオモミタこと榎田武雄。一九六一年の建立の日から三十周年の記念すべき年を迎えようとしていた。

カリパトリア市長からの招請で、「国旗掲揚台建立三十周年式典」に参加することになった私に、友人の音楽家二人が手弁当で同行してくれることとなった。

ピアノストの的川幾子さん、ソプラノ歌手の味香友子さん。

その小さな町、カリパトリア市での記念コンサートで現地の人たちが用意してくれたピアノは西部開拓史時代の、ひどく音程の狂ったグランドピアノだった。

的川さんは現地の人たちが所望したピアノのソロ曲の演奏はさすがにためらったが、プッチーニのアリアからアンコールの「メモリー」まで、古ピアノにむかって玉のような汗をかきながら味香友子さんの伴奏を務めてくれた。

彼女の底抜けに明るく、子供のように純真な性格は、訪問する先々でアメリカ人の心をとらえ、周りに賑やかな人だかりを作った。

プロの演奏家の生の音楽に触れることはほとんどない、砂漠に囲まれた小さな町でのささやかなコンサートだったが、的川さんと味香さんの醸し出す音が聴衆の心に、まるで乾燥した土が慈雨を吸い込むように染み透っていく情景を私は目のあたりにした。

聴衆ひとりひとりが眼を輝かせて、彼女たちの音を必死で拾いとろうとしていた。

どのように巧みな修辞のスピーチも彼女たちの音楽の前には無力だった。

コンサートの終わり、ロサンゼルスのホテルで現地スタッフとの別れの会食の席上、的川さんの演奏に繰り返し賞賛を送りつつ別れを惜しむ現地スタッフの言葉に彼女は、

「こんなにみんなに喜んでもらえて、歓迎してもらえて、わたしも、死んでもいい。ほんとよ、今回みたいに幸せな気分ピアノが弾けたの、ほんとうに初めて。一生の幸せよ」と言い終えると、そのままテーブルに「ワー」と大声で泣き伏した。

的川さんの体調が急激に悪くなったのは、アメリカから帰国して間もない頃のことだった。

「（ワインの）ロゼのようなオシッコが続くんよ」

とゲラゲラ笑いながら私に話していた。

腎臓ガンであることを、しかも末期の状態であることを彼女は知っていた。

的川さんは伴奏ピアノストとして多くの声楽家を育て、世に送り出した。

彼女は歌手が最高の状態で、最良の条件で発声できるように驚くほどきめ細やかな気配りをしながら鍵盤に向かう。情緒の起伏の激しいわがままな歌手をなだめたり、励ましたり。オペラで主演する歌手は、初演の数ヶ月も前から彼女のピアノを頼りに練習を続け、初演の日、極度の緊張と不安を押し殺してオーケストラの待つ舞台へ一步を踏み出していく。彼女は舞台の袖からボクシングのトレーナーのように、歌手の一挙手一投足を厳しく見つめる。スポットライトは常に歌手にあてられ、終演のあと彼女が花束を受け取ることは少ない。

コンサートの日程が決まると、彼女はオンボロの外車に乗って朝から晩まで駆けずりまわって、だれよりも多くのチケットを売り歩くのである。

「いい音楽を聞いても腹一杯にならんもんね。それが私らのつらいところなんよ。足で稼がんとね」と彼女はいつも話していた。

よほどの愛好家でない限り、古典音楽のコンサートチケットを望んで購入する者は少ない。まして無名の演奏者のコンサートを。

音楽家たちによって高度に錬磨された芸術は、権力と富の支えによってその文化を永らえてきた。中世の王侯貴族が現代の国家や企業に形を変えただけで、「腹の足しにならない」音楽は「腹満ち足りた」、しかし世の流れとともに転変する時々の富や権力の庇護を受けて育つ。しかしながらその恩恵を手にするのは、絶対基準によることなくほとんど曖昧（あいまい）に選別された、極めて少数の芸術家たちだけであると思う。

あらゆる分野の音楽が大衆のものとなった現代においても、日本における西洋古典音楽や邦楽の分野に根強く生きている、中世さながらの因習や伝統を奇異に感じることもある。

的川幾子さんは演奏活動のかたわら、世界の子供たちが広島に集まって「平和」をテーマに数ヶ月かけて議論しながら、台本執筆から振り付け、舞台の小道具まで手作りで仕上げているミュージカル、「ピースチャイルド」の音楽監督を長年ボランティアとして務めていた。

一九八二年、英国人デービッド・ウォールカムによってアメリカで設立された非営利団体「ピースチャイルド財団」の思想が、このミュージカルの基本理念になっている。

広島に集まる子供たちはその親ですら戦争体験を持たない世代も多く、彼ら独自の切り口で真正面から「平和」を語り合い、その果実を舞台の上の踊りや音楽のなかに表現している。それは十代の青年達にとっては苛酷で、驚くほど高度な作業であったが、公演を通してそれを成し遂げた青年たちはきわめて密度の高い経験を身につけて広島を離れた。

的川さんはミュージカルに出演するため長期間広島に滞在する海外の子供たちを自宅に預かり、寝食を共にしながら我が子のように連れ歩いた。

彼女には「国境」、「国籍」、という概念がほとんど無いようだった。的川さんは一九九一年六月、地元の新聞に次のような言葉を寄稿している。

「『受けるより与える』ことに喜びを感じている。ミュージカル『ピースチャイルド』実行委員の学生たちに昨年、今年と出会い、私は頭の下がる思いとともに、一人ずつの名前を声を大にして叫びたいほど感激している。

ピースチャイルドは、例えば、壊れやすいガラスのような地球を人々の手で守るには、そしてその地球に住む人々が戦争をなくし、いがみ合うのをやめて幸せに暮らすには一人一人がどのような意識を持てばよいのかなど、多くの討論を重ね、それらをまとめて自分たちの台



了

本を作り、ミュージカルにするのである。この公演を支えているのが、実行委員を務める広島市内の大学生たちなのだ。彼らなくして公演はできない。心の優しさと精神の強さを持ち合わせる子供たちの良き指導者でもある彼らは、礼儀正しく、明るく、愉快で、そのうえ『自分たちが人から何かをしてもらう』のではなく、『どれだけ人にしてあげられるか』に若い力をかけているのだ。

勉学の合間をぬって資料を作り、日程表を作成し、内外の子供たちの和をつくり、世話をし、運営基金を集め、労力を惜しみなく発揮している。

とかく自分さえ満足すれば、自分さえ不自由しなければ、と自己中心の人が多い今の社会のなかで、彼らのボランティア精神は若々しく、健全で、尊いものである。彼らと接する子供たちもきつと、その精神を受け継いでくれると思う。彼らと知り合えた私もまた幸せである

一九九一年六月二十七日 中国新聞

一九九四年夏の「ピースチャイルド94」公演。的川幾子さんは病室と往復しながら務めた、ピースチャイルドの舞台を車椅子に乗って見届けた。

終演ののち、彼女の死に近いことも知って、公演会場の出口に整然と整列して待つ出演者、スタッフたちの懸命に涙をこらえる拍手に送られた。彼女が長い音楽生活のなかで数多くは味わったことがない、万雷の、そして彼女が立ち去ったあとも響き続ける喝采であった。

病院にもどった彼女は病室の親族に、

「ああ、ひとつづつ肩の荷がおりていくみたいね」

と語り、その直後、息をひきとった。五十歳をわずかに超えたばかりの彼女は音楽を生涯の伴侶として過ごし、死を迎えるまで独身を通じた。

音楽の世界の頂点にあるといわれる人。無名のコンサートのチケットを売り歩く音楽家。世の評価はともかく、彼らが音楽に寄せる愛情と情熱は、双方、同量で相等しい。

音楽家たちの思いが蒼海のごとく深く、そして純粹であればあるほど、刹那の音に生きる彼らの後姿に切なさを感じるのはなぜなのだろうかと思う。

# おじさんの青春日記

くその4く

「阪神淡路大震災」

神戸市立本山第三小学校にて

		ふるさと				
--	--	------	--	--	--	--

その日、李浩麗はもう三時間余りも楽譜を片手に檻（おり）のなかの動物のように部屋を歩き回りながら、彼女自身が編曲したモンゴル民謡メドレー「蒙古牧歌」を繰り返し口ずさんでいた。新春を祝う神戸市内のホテルでのコンサートは一週間後に控えているというのに、独特の節まわしのモンゴルの古曲は何度歌っても納得できるものに仕上がらなかった。広大な草原を疾駆する馬のように早いテンポの旋律のあと、騎馬の男女が恋を語らう叙情的で緩やかな旋律に移る。テンポの緩急は繰り返し続く。

楽譜に無造作に書かれた原曲の音符や記号を李浩麗は何度もうらめしく思っ、譜面を指先で弾いた。

「もうええわあ。あした起きてからにしよう」

ベッドのそばにおいた中国製のアンティーク時計は午前二時をまわっていた。

一九六四年（昭和三九年）神戸に生まれた李浩麗は、台湾をルーツとする華僑の三世である。

一八九四年（明治二十七年）勃発した日清戦争に勝利した日本は清国から約三億一千万円余の賠償金を獲得するとともに、他の清国領土とともに台湾を植民地としてその統治下においた。日本による台湾の統治は一九四五年（昭和二十年）、日本が太平洋戦争に敗れるまでの五十年の長きにわたって続く。当時の日本政府は台湾の植民地経営にあたってさまざまな冒險的、進歩的な政策を取り入れようとした。

明治維新によってそれまでの世襲の地位を失った武家の子弟達が、近代的な知識を携え、志（こころざし）に燃えて東シナ海を台湾へと渡った。彼らにとって台湾は日本による資本収奪の場というよりも、国家経営の壮大な実験場と映ったことだろう。彼らの試みは被支配者である台湾住民の非協力や反抗にあつて難航を極めたが、武士の末裔達がもたらした技術や思想は無数の種子となつて日本語とともに台湾各地に根を下ろした。

日本はその後、大正、昭和と急速に軍国主義に傾いてゆき、アジアを中心に版図を広げ、やがて滅亡の時を迎えた。しかし、江戸幕府時代の武士思想の土壌が付いたまま台湾に移植された明治維新直後の日本の価値観や思想の残滓は、日本本国が興隆から破滅へと進み、再び太平洋戦争後の復興を遂げる間にも台湾国内でゆつくりと熟成していった。

昭和の初期。当時、日本植民地下の台湾では真珠が珍重され、庶民のあいだで大変な人気を呼んでいた。安政五年（一八五八年）三重県鳥羽に生まれた御木本幸吉によって明治期に日本で最初に開発された養殖真珠は盛んに海外へ輸出されており、日本真珠の代名詞となつた「ミキモト」の名声は台湾にも届いていた。

李浩麗の祖父、李通坐は日本の三重県志摩半島一帯で盛んに商われていた真珠に強い興味をそそられ、実兄、李通寿とともに日本へ渡ることを決意した。日本の植民地であった台湾の青年たちにとって、宗主国日本に渡つて商売を始め、成功をその手にすることは果てしない大きな夢であった。

一九三三年（昭和八年）、李通坐の六歳年上の兄、李通寿が日本へ渡る。四年後の一九三七年（昭和十二年）、李通坐が兄の後を追つて日本へ。通坐、二十歳であった。わずかな荷物を手に台南を出た李兄弟は三キロの陸路を北の港町、基隆へ。さらに海路を神戸へ。青雲の志を抱いて日本めざして東シナ海を渡る李兄弟。

志摩半島で真珠の玉を買い付け、台湾市場に卸す商いから、二人の事業はやがて神戸に根をおろして、ブローチやネックレスなどの宝飾品の加工業へと発展していく。

日本敗戦直後、李通坐は台湾から妻や家族をまだ空襲の爪痕も生々しい神戸に呼び寄せた。祖国も戦場となつた日本の長い戦争が終わつて、李一家はやっと神戸を安住の地として平和な日々を取り戻したのである。

神戸は日本でも有数の真珠流通の町。かつて神戸で「真珠王」と呼ばれた商人も台湾の華僑であり、日本に在住するいわゆる華僑約二五万人のうち、その半数が台湾由来の華僑であ

る。「僑」とは仮住まいの意。華僑は生まれ故郷の中国本土や台湾を離れ、世界中の地域や町に根づき、その土地に溶け込んでさまざまな事業を営んでいる。緊密なネットワークを張りめぐらせていて、互いに助けあい、支えあふ。時には彼らが居住する国の政治、経済政策まで左右する隠然とした影響力をもつこともあるのである。彼らの祖先が生地、中国を離れた瞬間から中国人でありながら中国人ではない、いわば世界人として地球を祖国として生きていく宿命を負っている。

創業者である父親、李通坐の事業を継承し、経営をさらに発展させて日本での真珠宝飾品業、台湾での海老、魚の養殖業と手広く事業を営む、李文正の長女として李浩麗は生まれた。神戸市に生まれ、幼年期を神戸で過ごした浩麗は十歳の時に李一家のふるさと、台湾島南部の都、台南市に戻り、そこで十八歳までを過ごした。

台南市は眼前に中国大陸を望む、台湾海峡に面した港都。かつて清朝が隆盛の時代にはここに首府が置かれ、中国大陸やアジア沿海諸国、ヨーロッパとの交易、軍事の要衝の地であり、海路もたらされるさまざまな文化が混交する台湾きつての古都である。

南北に長い島である台湾は、首都である台北市から高速道路を南下すると、車が進むごとに土の色が茶色に変わり、車窓の外にバナナや椰子（やし）などの熱帯の植物が徐々に増えてくることに気づく。市街を抜けると人々の生活臭や工場が吐き出す人工の匂いは消え、生暖かく、潮のぬめりを感じさせる熱帯の豊かな風が鼻先を通りぬける。台南市は北回歸線よりもさらに南、台湾島の最南端にも遠くない熱帯の都市である。

李浩麗は南国の強い陽射しを体じゅうに浴びて、多感な少女期をこの地で伸びやかに過ごした。

一九七四年（昭和四九年）、李浩麗、十歳。日本では「日本列島改造計画」で華々しく首相の座に就いた田中角栄首相が世論の金権政治批判によつて退陣し、東京の片隅に日本最初のコンビニエンスストアチェーン「セブンイレブン」が産声をあげた年であった。

「道のまんなかを沢山の樽や農作物を載せた荷車を牽く水牛が悠然と歩くそばを走って学校へ通っていました。家族みんなを鈴なりに乗せたバイクやスクーターが私たちを追い抜いていくんです。そのたびに車輪から弾き飛んだ牛糞の交じった泥が私たちめがけて飛んでくるんです」

と笑いながら当時を回想する浩麗。

「台南にあつた家は風通しを良くするために天井の高い家で、お隣りの家とは渡り廊下のような屋根つきの通路で繋がっていました。スコールの多い所でしたから、雨が降っても傘をささずにお隣さんと行き来が出来るんです。排水設備が悪くつて、大雨の時は家のなかでも雨靴で過ごしていたんですよ。その渡り廊下で近所の老人達がウーロン茶の品評会をやったり、子供達はローラースケートに興じたり」

神戸の都会に育つた浩麗は数十年前の日本にタイムスリップしたような環境にとまどう。怒涛のような高度経済成長もインフレも耳をつんざく土木工事もなく、ここでは時間がゆったりと流れていた。

「縁日には野外映画会や地方を巡回して歩く旅芸人の演劇『歌仔戯（ゴアヒ）』が必ず上演されていました。自分の家から椅子を運んで、競いながら場所とりをして、星空の下で観るんです。リアカーで運ばれてくる移動式のメリーゴーランドというのがあって、わずかな料金を払って乗せてもらうんです。中華菓子や餃子（ぎょうざ）なんかを売る沢山の賑やかな屋台。竹で編んだ笠をかぶつたおばさんが、バナナや龍眼やマンゴーなんかの果物を山盛りに肩に担いで町に売りに来てました。私が生まれた神戸の町のように清潔で隅々まで整備された町にはほど遠い町でしたが、なんだか日本にいるよりずっと豊かな感じがしたのを憶えています」

日本帰りの浩麗は同級生に珍しがられる。

「ねえ、日本ってどんなところ？ 寒いんでしょ？」  
 「うん。台南に比べたらずっと寒くって、冬には氷を削ったみたいな粉雪が落ちてきて、町じゅうが砂糖を撒いたように真っ白になることもあるのよ」  
 李浩麗は友達に聞かれるままに答える。

「わあ、雪ってすてき！ ねえ、コウベって大きな町なんでしょ？」  
 目を輝かせる同級生。

「とつても大きな町よ。大きな港があつて、世界中から船が集まってきた、たくさん荷物降ろすの。中華民族が寄り集まって出来た町があつて、台湾と同じものが食べられるし、学校もあるし、外国人の仲間もたくさんいるのよ」

浩麗の通学する永福国民小学校は、台南市でも有数といわれる音楽教育に熱心な小学校。なかでも合唱活動は台湾国内でトップレベルにあつた。音楽の授業のなかでその才能を見いだされた浩麗は、五年生になって合唱グループの代表に選ばれる。音楽の世界との出会いであつた。中学生になってソロとして歌うようになり、成長にしたがつて音楽へのはるかな道を着実に歩みはじめた。

やがて十八歳を迎えた李浩麗は父に連れられて再び神戸に戻り、幼い頃からの夢であつた日本の音楽大学へ入学する。浩麗にとつて歌の世界は、究（きわ）めどもなお遠い芸術の道であり、台湾、日本と転地を重ねる彼女にとつて、日々の憂いを慰める無二の散歩道となつた。彼女はまるで歌を口ずさむような軽快な口調で関西弁の会話を交わす。

社会人となつた今では国際都市・神戸で頻発する中国系外国人訴訟の法廷通訳や、日中間の国際会議の同時通訳として働くかたわら、それらの間のわずかな時間をも惜しむように精力的な音楽活動に携わっている。

月曜日 早朝から神戸市内での国際会議の同時通訳。夕方終了。

同夜、神戸市内でのコンサートに出演。

終了後、スポーツジムでプールのなかを歩きながら

新しい曲の歌詞を覚える。深夜、翌日の法廷通訳に備えて、

資料の整理。

火曜日 午前中、神戸近郊の町でコーラスの指導。

昼食抜きで裁判所での法廷通訳。

その後、毎週通学する中国語教室で国際会議を

シミュレーションした同時通訳法の勉強会に参加。

夕方、結婚式場で聖歌を歌う。

夜、パーティーへ音楽仲間と共に出演。

水曜日 午前、弁護士とともに拘置所での中国人被告接見通訳。

終了後、裁判所での法廷通訳。

自宅で小学生のピアノレッスン。

夕刻、神戸市内の中国語教室での講師。

深夜まで音楽仲間三人とコンサートの音合わせ。

ある週前半の彼女の一日のスケジュールである。

電車を乗り継いで周辺の町を目まぐるしく移動する間にも、楽譜とMDを手離すことはない。通訳の仕事を静、陰とするなら、彼女にとつて音楽活動は動であり陽の発露。それらを日常のやりくりで巧みに均衡させて、李浩麗は一刻一刻を懸命に生きている。身長一五六センチの小柄な体には歌への熱い思いと、東シナ海の波濤を乗り越えてきた彼女の祖父、李通坐を思わせるような挑戦と進取の血流がみなぎっているようにみえる。日本人からみれば彼

女は外国人に違いないのに、我々がとうに郷愁の世界へ追いやってしまった、きわめて日本的な義侠（ぎきょう）の精神を彼女のきつぱりとした語り口のなかに垣間見ることがある。

「命がけて『豊かな国、日本』へ密入国した中国人たちを裁く法廷で通訳として働くとき、複雑な思いをもつことがあります。彼らは法を犯してまで日本へ渡り、日本の最底辺に居て日本の景気や企業利益に翻弄されるのです。確かに日本はアジアのなかでは飛び抜けて豊かな国。でも『豊かさ』ってなんだろうか、って思うことがあります。日本以外のアジアの国には、はるか前に日本から姿を消した情景や人々の友愛が残っています。そこには、貧しいけれど人間が手をたずさえ支えあって生活している温もりがあります。経済の発展からはとり残されているかもしれないけど、人が自然を敬って、畏れを抱いて謙虚に生活しています」。

李浩麗が自宅二階でモンゴルの古曲の練習に疲れてベッドのなかで深い眠りに落ちていた頃、浩麗の住む神戸市中央区から南西へおよそ二十キロ、明石海峡の海底からさらに深さ一万八千メートルの地殻のなかで、とてつもないエネルギーが岩盤を激しく震わそうとしていた。

一九九五年（平成七年）一月一七日午前五時四六分。李浩麗は今まで聞いたこともない、地底が吠えるような「ドーツ」という鈍い音とともに、家ごと突き上げられるような上下の激しい衝撃に襲われた。ベッドから起き上がることにすら出来なかった。体を縮ませたまま、激しい揺れに翻弄された。人形や、本や、衣裳ケースが崩れ落ちてくるのがスローモーションのビデオを見るように視界に入った。窓ガラスはみじんに破れて部屋に飛び込んでくる。激しい揺れは数十分も続いたように思えた。そして続けざまに襲ってくる余震のたびに体はすくみ、悲鳴すらあげることも出来なかった。すべては暗闇のなかでの出来事だった。

「みんな、だいじょうぶっ！ どこにおるっ！」

長い揺れが止み、部屋の扉を蹴破って真っ暗な廊下に這い出た李浩麗は叫んだ。

「みんなだいじょうぶっ！ 父さんはどこっ！ 母さんはだいじょうぶっ？」

「麗ちゃん、ここや、ここにおるよお！」

同じ二階の部屋にいる弟、建隆の叫びが聞こえ、浩麗は暗黒のなかに一筋の光を見つけた思いだった。

五六歳になる父、そして母、妹、弟は無事だった。夜明けにはまだ間のある暗闇のなか、一家は寝巻のまままでの道路に這い出た。たちまち零度近い寒気が襲ってきたが、寒さを感じるゆとりすらなく、五人の家族は言葉を失ったつなつたまま辛うじて倒壊を免れた家屋を見上げた。隣にあるコンクリート造りのホテルの一階部分は支柱が折れて座屈し、駐車場の車はビルの荷重をまともに受けてアルミ缶のように押し潰されていた。刺すような寒気なのか、街は不思議と静かで、家並みのなかには大惨事が自分たちを襲ったことがまだ信じられない多くの人々がいた。暗闇が破壊の全貌を隠していた。近くのコンビニで我先に商品を奪う者。争う声。夜明けとともに神戸の街が修羅場と化す直前の序曲を聞きながら、李浩麗はただ震えていた。

兵庫県を中心に二府十三県にわたって死者六千三百人以上、負傷者四万一千人以上の大被害をもたらしたこの地震は、のちに「阪神淡路大震災」と命名された。

\*

「シャチョーっ！ 相談があるんじゃないか？」

私の会社に隣接する、PL（パーフェクトリバイ）西部教会教会長の家子さんから阪神大地震慰問の相談を受けたのは、大地震から二十日ほど経ってからだった。

PL教会を窓口に広島市民ボランティアチームを結成して、神戸の街へ救援に行くといふ。

岩手県生まれの家子さんは私と同じ世代。たまたま隣り合う私の事務所と彼の教会を、親戚のように行き来する親しい間柄が十年近く続いていた。北九州市を振り出しに、佐世保、広島、東京、名古屋と、数年ごとに各地の教会への転勤を繰り返したのち、広島西部の教会長として再び広島へと赴任した。

仕事とはいえ、彼は当然のことのように淡々と初めての任地を転々とする。その土地で物を売るでもなく、会社に勤めるでもなく、ただひたすらその土地に馴染んで、そこに住む人々の心と向き合う職に没頭するのである。

「シヤチヨーっ、お茶飲みにこんですかあ？」

廂（ひさし）を並べる隣の窓から家子さんが声をかけてくる。

「せんせい、いまお客さんじゃやえ、あとですぐ行きまーす。あつ、それよりせんせい、こつちへこんですかあ、アメリカから戻った友達が面白い話を聞かせてくれるところなんじゃあ」

窓ごしに私の声が相手に届く。

「りょーかい。ただちに向かいます」

家子さんの快活な返事。

十秒ほどで慌ただしくバタバタと階段を駆け上がる音がして、彼の眼鏡ごしに見えるクルクルした丸い目が私の部屋をのぞく。こんな付き合いだった。

設計図を入力するパソコンやファクシミリ、電話の無機質な音が一日じゅう響いて、利益の多寡が話題の主になる私の事務所からわずか二メートルと離れていない建物のなかで、家子さんは奥深い人間の業（ごう）や悩み、喜びや悲しみ、あからさまな人間模様と二四時間向かい合う生活をしていた。

この教会では扉を開けるすべての人が「ただいま」と声をかけて、玄関に歩を踏み入れる。終日鍵がかけられることはない。

さまざまな思いを抱いて、教会員が彼が主宰する教会の扉を開ける。

「ただいま」

という声に家子さんは、

「お帰りなさい」

と声を返して、時にはその会員の肩を抱くように教会のなかに迎え入れる。教会員の「ただいま」という声の響きと表情から、家子さんはその人がきょう背中に負って来た思いの大半を知るのである。夫婦や親子の葛藤、子供の非行の悩み、結婚や就職のあっせん、トラブルの仲裁。商売の相談。

彼と隣合わせで過ごしたおよそ十年の間、彼は私との会話のなかでその宗教の教理について触れたり、入信を勧誘したりするということは一度もなかった。しかし彼の日常を知る私は、彼が信じる宗教の神髄と思えることを彼の言動の端々にうかがうことが出来た。「祈る」ことだけでなく「行なうこと」。「実行」すること。そして、人生を文学や絵画、音楽の創作にも通じる一編の「芸術」としてとらえ、理想とする具体のイメージを心において、時に修正し、誠を尽くしていこうという強い意志である。

「毎日、毎日、人と会って、話を聞かせてもらいます。それがもつとも大切な僕の仕事なんすよ。とにかく出来るだけ相手と同じ気持ちになれるように努力して、話に耳を傾けるんです。その人と一緒に学ぼうっていう気持ちでね。そして、その人のために祈ります人間って、病気や苦しみを抱えているときはとても純で、人間的になれるんです。苦しみから逃れたい一心でね。でも、その苦しみが薄らぐと、いつの間にかその時のことを忘れてしまふんすよ。純な、人間的な初心をそののちもずっと持ち続けてもらおうようにお手伝

いすること、僕の大事な仕事なんすよお」

と家子さんは穏やかに話す。

彼は朝の祈りから始まるその教えを、いかに咀嚼（そしゃく）して日々の実践の規範や糧（かて）とするか、相（あい）に対する人と同じ目線でどう交流するかに心を砕いていた。

「すごいなー！」

「素晴らしい！」

「いいですねえ！」

「幸せな人だ。まわりの人に感謝しなくちゃあ」

という言葉が彼の口癖だった。否定の言葉はほとんどない。

「とにかくなんでも、まず自分からやってみなくちゃね。人にこうしてほしい、やってみなく、と愚痴を言ったり嘆いたりすることは易しいことだけど、自分が出ること、よく考えて、そして実行に移してみたら、案外とすいすい事が運ぶことって多いもんすよお。本当に小さなことからいいんすよお」

彼は我々が見逃している日常のささいな現象や、人のひそかな思いを鋭敏に見つけ出して、大げさな身振りで感動をあらわにする。そして、相手への予断を無地にして人と向かいあう。

私が日々の利益計算や経営の駆け引きに疲れた夕刻、玄関先の立ち話での彼の何気ない言葉に、涼風に出会ったような癒（いや）しを感じる事が幾度もあった。

「なんでも屋のようにいろんな相談を受けたり、広島じゅう走りまわっても、『うまくいきました』『解決できました』と教会員さんと喜びを共に出来ることって少ないすよ。僕ひとりの力って、たかが知れてるし。三十年近く教会にいて世の中の流れと人の心を見つけているけど、日本の繁栄につれて人の気持ちが荒（すさ）んできたって思うことが多いすよ。日本がこんなに裕福にならなかつたら、僕は失業してるかもしれんね。物やお金が増えるほど、日本は貧しくなってきたんじゃないかと思う」

いつだったか家子さんが、縁なしの眼鏡を外してレンズをハンカチで拭いながらつぶやいた言葉である。

会社員のお父さん、美容院を経営するお母さん。両親の勧めで彼は小学校を卒業とともに岩手県の生家を離れた。仙台市内の大学を卒業した彼は、地球全体を教区とするPL教団の教師としての道を選んだ。宗教に身を委ねた瞬間から彼は生まれ故郷、岩手県を捨てていく。

「小学生の頃は三メートルもの雪が降ってねえ、雪の朝には大人たちが総出で子供たちの登校のための道を作るんすよ。雪の上を『カンジキ』という竹で作った輪を長靴にくくりつけて、雪を踏みわけて一列になって学校へ行くんです。吹雪の日は一メートル先も見えなくなってしまう。学校へ着くと薪を焚くストーブがあつて、みんなその周りへ弁当を置いて温めるんすよ。教室じゅうになんともいえない臭気が漂ってねえ。縦横に連絡洞のある『かまくら』をいくつも作って、かくれんぼなんかしたなあ。体じゅうびしょびしょになって、竹スキーに下駄スキー。野球なんか雪の上にベースおいてやっちゃうからねえ」

「みちのく生まれの家子さんの昔話には、長い冬のあいだ町じゅうを埋め尽くす深い雪にまつわる逸話が多い。北国の冬の陽は短い。もちろんテレビゲームなどもなく、テレビすらも日常のものでなかった当時、小学生の家子少年は長い冬の夜をどのように過ごしていたのだろうか。」

「生涯を同じ土地で暮らすのはもつたないなあ、なんて思っていました。地球は広いわけだし、せめて日本中あちこちの町で暮らしてみたいと夢見てたなあ。それに、母の影響もあって、人の為になにか役にたてる仕事につきたい、なんてぼんやり考えてました」

東北新幹線・北上駅からさらにJR北上線で山間部を西へ一時間。東北の名湖、田沢湖にも近く、地名のとおり、湯湧き、緑濃い岩手県和賀郡湯田町が彼の生地である。

「お宅の会社の商品、安う譲ってもらえんじやろうか。神戸の人に温かいもの食べさせてあげたいんじやあ。協力してもらえるとホンマありがたいんじやけど。広島の『お好み焼き』がぴつたりじやいうて仲間とも話したんよ。うってつけの会社がうちの教会の隣にやああるもんね。おまけにワシ、その会社の社長と友達じゃけえ。」

いつもの標準語と広島弁、それに東北なまりの交じったヘンテコな発音で、彼はほほ笑みながら私の顔をのぞき込むように語りかけた。

私の会社の食品工場で毎日生産している「広島流お好み焼き」を神戸に運び、現地で温めて被災者に無償で配りたいというのである。

家子さんは計画を細々と説明する。教会のネットワークを通じて集めた被災地の情報、日程、スタッフの動員計画、資材調達計画、車両計画、安全規定、道路情報。熱っぽく語り続ける家子さん。

大地震が発生して以来、連日トップニュースで報道される阪神淡路地区の被害を目のあたりにしている私は、彼の話の中途でさえぎるように答えた。

＊

土曜日の夕刻、広島を発った私たちトラック十台の車列は山陽道を東に向かった。

神戸を訪れるメンバーは家子さんをリーダーに総勢八十人。被災地近くから刻々入る情報のとおり、被災地周辺は戦場を思わせるような異様な状況だった。

デコボコの車体、傷だらけで逃げるように市外へ出ていく車。物々しい自衛隊のトラック。「緊急物資輸送中」の標示を掲げた大型トラックの群れ。

夜明けを待つて神戸の街に入った我々は、朝日のなかに浮き上がる街の惨状を目のあたりにした。車中の皆が急に寡黙になる。車が街角を曲がるたびに私は息を呑んだ。表通りに面した鉄筋造りのビルはかるうじて姿を留めているものの、一步裏通りに入ると、民家や商家のほとんどが正確なピンポイント爆撃を受けたように無残に倒壊していた。まったく無傷の商業ビルのすぐ隣に、ダイナマイトで破壊されたような民家が瓦礫の山と化していた。周囲三百六十度を見渡すことのできる情景は、のっぺりとした平面のテレビニュース画面とはあまりにも異なっていた。

私たちの向かう東灘区本山第三小学校一帯ではおよそ千人が犠牲となり、死因のほとんどは建物の下敷きによる圧死であった。熟睡していた人々は突然落下してきた数トン、数十トンの荷重に押し潰され、身動きすら出来ないままに絶命した。そして、断末魔の叫びをあげる人に、火炎が襲ってきた。街なかには夜が明けてしばらく経つというのに、人影はほとんどない。死んだ街であった。

一九四五年（昭和二十年）日本敗戦の年の二月四日。神戸はカーチス・ルメイ將軍指揮のアメリカ空軍による、日本本土無差別爆撃の最初の目標都市に選ばれた。

その日、午後二時から二時間にわたってB29一二九機が工場地帯と民家、港湾を無差別に爆撃した。そののち、三月、五月、六月と三度にわたって大規模かつ無差別の焼夷弾爆撃を受け、終戦までの六ヶ月間で神戸全市は町の四方が見渡せる灰燼の原野となった。二月初空襲から終戦までアメリカ軍による神戸への爆撃日数は延べ八三日、爆撃に加わったB29の機数は延べ三六六二機、犠牲者八八四一人、家を失った市民は五八万九千人余を数え

た。米軍の神戸空襲による死者数は「阪神淡路大震災」の死者にほぼ匹敵する。この一連の波状爆撃は地上に住む人間を日本人、外国人と識別することは一切なく、その頭上に爆弾の雨を降らせた。多くの華僑たちが神戸市民と運命を共にした。

一九三七年（昭和十二年）の蘆溝橋事件をきっかけに中国とドロ沼の戦争状態に入った日本軍部は、日本に在住する華僑を「敵国人」「シナ人」としてさまざまな迫害を加えた。特別高等警察（特高）の厳しい監視下、華僑は仲間同士の交流や集会、自由な移動さえも許されず、ささいな違反には苛烈な拷問と投獄が待っていた。華僑たちは生まれ故郷を捨て、日本を第二の故郷として日本社会に溶け込もうと血のじむような日々を送っていたが、ひとたび日中間に戦端が開かれるや彼らはたちまちにして職を失い、教育の機会を奪われ、その日の食糧にもこと欠く辛苦を味わったのである。

現在、神戸中華総商會會長を務める中国福建省出身の華僑、林同春氏（七六）は、その七十年近い日本在住の波乱に満ちた生涯を回顧した著書「華僑波瀾万丈私史」橋渡る人」（エピック社刊）のなかでこのように書いている。

（父親の）行商に同行する（小学生の）私は、やはり他の子ども達とは違っていた。日本のようにほとんど同じ民族だけで暮らし、外国とも長く交わらずにきた国民は、何かにつけて人と同じであることを重視する。他の人と何が違っていることに対し、ほとんど罪であるかのような意識さえ抱く日本人にとって、私は特異な存在であり、ある者にとつては不快な存在だった。私自身の中に、中国人であるという深い自覚があったわけではないし、何人でありたいという強い思いがあったわけではなかった。けれど私を指差す人の姿を目にし、『シナ人』とささやく人の言葉を耳にするにつけ、私は自分が中国人であることの自覚を強くしていった。私を中国人に育て上げてくれたのは、父母と、日本に来るまでの九年半、私を育ててくれた中国大陸であることはもちろんだが、それ以後に私が接した多くの日本の人たちだった。シナ人という陰口を聞くたびに、私は中国人としての誇りをもつことの大切さを知り、侮られるたびに、より立派な中国人になりたいと思うようになった。

十六歳の林少年は父の仕事である古着の行商を手伝うようになり、ある時岡山県の道なき深山を歩くうちに県境を越えてしまう。スパイの疑いをかけられ、特高に留置された林少年は一日三時間にもわたる容赦ない拷問を受けたのち釈放された。いわれない嫌疑による留置、拷問はそれから幾度も林少年を襲った。

そして日本敗戦。華僑は一夜にして「敵国人」から「戦勝国人」となった。神戸に進駐した米軍は同じ戦勝国の国民である華僑中国人たちに対し、圧倒的に豊富な物資を提供した。しかし、日本国民の日々の飢餓と塗炭の苦しみを知る華僑たちは、快哉を叫んでそれらを受け取ることをためらった。

日本敗戦直後、岡山県津山市内で食堂を営み始めた林同春氏はその頃のことをこう回想している。

様々な人々の姿があった。（中略）一杯の雑炊を三人の子供達にだけ分け与え、それを隣でじつと見ている中国からの引揚者の母子がいた。一椀の食べ物の前に、それぞれ境遇があぶり出されてくるのだ。母親の放心したような疲れ切った表情が痛ましさを募らせた。私は黙って雑炊をもう一杯机の上に置いた。『違いますっ！』驚いて声を上げる母親に、私は黙って首を振ってテーブルを離れた。さらに何かを言いかけた母親が、口をつぐみ私を見つめて深々と頭を下げた。私は少し口元を緩めてうなずいた。母親が子供たちの前にどんぶりを押しやると、奪い合うようにして子供たちが口をつけた。店を出ていく母子を見ながら、彼女達の行く先を思わずにはいれなかった。テーブルには、結局母親が口をつけることもなかった二つのどんぶりが、まるでなめたかのようにきれいになって残っていた。

戦後の神戸の復興は、国際港・神戸港を舞台とした華僑の商人たちのたくい稀な商才と情報ネットワークによるところが大きかった。彼らはいち早く海外に居住する華僑たちの支援を受けて商売を復活させ、市民生存のための流通を確立させたのである。米軍の爆撃で壊滅した町が、日本有数の都会に復興してちょうど五十年。

巨大な地震によってふたたび神戸は壊滅した。

本山第三小学校の避難者は約七百人。教室が仮住まいである。周辺には二千人近い被災者が庭先やガレージにシートを張って生活している。小学校の校庭にテントを張り終えた我々は、さっそく手分けをしてお好み焼きの準備を始める。広島から持参した大釜でパツクに入ったお好み焼きを袋ごと煮沸したのち、何台もの鉄板の上で焼き上げるのである。お好み焼きの配給をラジオや掲示で知った被災者が、続々とテントの前に集まり出す。みるみるうちに行列が出来る。欠けた陶器の皿を持つ人、へこんだ鍋を大事そうに抱える人。一ヶ月におよぶ避難所生活を過ごしている彼らの顔色は土色のように、着たきりの衣服から異臭の漂う人もある。笑顔はほとんど見られない。

私の会社から運び込んだお好み焼きは二千五百食。錯綜する情報をもとにはじき出した数だけに不安が残る。

「ひとりにくつまで、と数の制限をせんといけんのじゃない？」

「いや、それはいいけん。家族の多い人はどうするん？ ここは年寄も多いんじゃけん」

「申し出の数だけ渡してもうたら、みんなに行き渡らんようになることもあるでえ。数が足りんのが一番困るよお」

「整理券、という手もあるのよ」

鉄板の支度をしながらのあわただしい議論である。

「疑ごうたらキリがないよ。並んでいる人をお願いして、事情をわかってもらおうよ。信じようよ」

家子さんの一声で、お好み焼きは行列に並ぶ人からの申し出のまま無制限に配ることになった。

二月の寒風が吹きさらす校庭に、大釜から立ちのぼる湯気が舞い上がり、鉄板の上でソースの焦げる香ばしい匂いがあたりに漂った。

私に同行した小学生の息子が行列の人数を何度も数えてテントへ報告する。

「ただいま六十人！ まだ増えとる！」

校舎で暮らす被災者に加え、学校周辺に住む被災者や各地から救援に来ているボランティアの団体も行列に加わる。

「百二十人！ ひとり平均三個として、えーっと、三百六十個じゃ！」

大釜のなかから次々と温かいお好み焼きが取り出され、鉄板の上で焼かれる。

大阪から歩いて神戸まで救援に来たという、女子大生のグループがソースを塗る、皿に盛り。行列する被災者に家子さんが一人ずつに声をかけながら、湯気の立つお好み焼きを手渡す。見る間に見事な製造と配給のシステムが出来上がった。

しばらくして、我々のテントの近くに一団のグループが校庭に青いビニールシートを敷き始め、スピーカーやマイクロホンをワゴン車のなかから運び出した。数人の男たちの手ぎわ良い作業で、急ごしらえのステージがまたたく間に出来上がった。

お好み焼きを焼きながら、遠くから私はその情景をぼんやりと見ていた。

やがて、黒いつば広の帽子を被った小柄な女性がシートの中央に立つマイクロフォンにむかって語り始めた。

「本山小学校で不自由な暮らしをしておられる皆さん、こんにちわ。お休みのところをこめんなさい。私たちは神戸で暮らす、在日外国人や留学生のグループです。きょうは皆さんに少しでも寛（くつろい）でいただければと思って、仲間と一緒にみなさんにお会いしにやってきました」

小柄な体には不似合いな、きつぱりと歯切れのいい声が彼女を取り巻く聴衆の耳をうった。

「このたびの地震で私たちの仲間も亡くなったり怪我をした人もあります。でも私たちはなんとか生きのびて、こうして元気でいます。神戸に住む私たちは在日外国人は学生も多くて、お金や物資をみなさんにお贈りする力はありません。でも、私たちは私たちが出来ること、歌や踊りをみなさんにご披露して、みなさんにくつろいで頂きたいと思いました」

教室のなかでお休みの方、うるさいと思われるかもしれませんが、どうかしばらく私たちをお許し下さい」

笑みをたたえて、その歌手は聴衆に語り続ける。

お好み焼きのテントから離れた私は、引き寄せられるようにステージを取り囲む聴衆のなかに立った。

彼らは神戸市内の魚崎小学校、この本山第三小学校を皮切りに、順次七、八ヶ所の学校避難所を慰問に巡回するという。

「私の名前は李浩麗、リーハオリです。神戸生まれの台湾人です。私は日本の学校で日本の唱歌をたくさん習いました。そのなかで私の思い出に残るいくつかの曲を聴いて頂きたいと思います。まず私が大好きな歌、みなさんもよくご存じの『ふるさと』を聴いてください」

テープの伴奏に乗って、骨組みのしっかりしたソプラノがスピーカーを通して校庭じゅうに響いた。甲（かん）高くなく、聴く者をゆったりと包みこむような穏やかな声であった。毛布で体を包み、立ったままの老人はその歌に合わせるようにかすかにくちびるを動かし始めた。さつきまで校庭を走り回っていた数人の子供たちは、ジャンブルジムのてっぺんで、身動きもせず歌手の歌に聴き入った。一人、また一人と、粗末なステージを囲む人の数が増えていった。

うさぎ追いしかの山  
小ぶな釣りしかの川  
夢はいまもめぐりて  
忘れがたきふるさと

いかにいます父母  
つつがなしや友がき  
雨に風につけても  
思いいづるふるさと

こころざしを果たして  
いつの日にか帰らん  
山は青きふるさと  
水は清きふるさと

高野辰之作詞 岡野貞一作曲

私は思わず自分だけに聞こえる声を出して、李浩麗の歌声に歌詞を重ねていった。あたりを無残に破壊された瓦礫の山に囲まれ、難民のように粗末な身なりをして力なくたずむ被災者のなかについて、『ふるさと』の旋律は言いようなく、情けなくて、切なくて、悔しくて、ならなかった。

家子さん、仲間、会社の社員や息子たちとほとんど眠ることも出来ず、夜の山陽道を神戸へと駆け通した疲れが私の神経を昂ぶらせていた。

『ふるさと』の歌詞を口ずさむうちに胸の底がこみ上がってきて、肩が上下に震えた。涙があふれ出た。涙をこらえようともし思わなくなった。

一心に歌う李浩麗の姿が涙にかすんで見えなくなった。頬に水滴が伝わり落ちてきて、二月の寒気に触れて氷のように冷たくなった。

李浩麗の歌う『ふるさと』が終わったとき、私はその場にいたたまれなくなってしまつて、誰もいない校舎の裏手に走りこんだ。そして、拭うことも出来ず涙を垂らした。

一瞬にして廃墟となった街に暮らす無数の人々の上に日が昇り、そして暮れていく。目の前に広がる神戸の町の惨状。うなだれる同胞たち。まさかこの現代に、見ることはなかったはずの情景が眼前にある。

日本が戦いに破れて三年目の冬に私は生まれた。その前年施行された新しい憲法とともに私は育ち、日本の復興と歩を合わせるように成長して社会人となった。

経済の発展や豊かさこそが人間を苦役から解放し、平穏な明日を約束するものと信じていた。校庭のステージから逃げるように校舎の陰に走りこんだ私は、私自身がたどってきた道を振り返りながら考えた。我々はこれまで何を獲得してきたのだろうか、そして何を失ったのだろうか。そして自分が毎日、多くのものを犠牲にして働き、獲得しているはずの成果が、気まぐれに起こる大自然の現象の前に余りにも無力で、無意味なものであることを。

日本敗戦以来、先人や我々がひたむきに構築し続けてきた様々な秩序や価値、システム、資本は、我々人間のもつとも素朴な願いであるはずの「生存の維持」すら約束するものではないことに慄然（りつぜん）とする思いだった。複雑きわまりなく張り巡らされた社会システムがひとたび瓦解したとき、太陽光を除くほとんどの生存条件が崩壊し、「飢え」がすぐ目の前に迫ってくることに気がついた。

我々が文明や繁栄と呼んでいるものは、巨大な岩盤の上に敷かれた一枚の薄い和紙ほどの厚みしかないことを。

テントに戻ると配給のピークはすでに過ぎていて、行列に並ぶ人の数も少なくなっていた。

当初の不安は外れて、お好み焼きの数はまったく不足することはなかった。

行列するすべての被災者は遠慮がちに必要な数だけを申告し、なかには他人への配慮の余り、一枚のお好み焼きを家族で分け合いたいと申し出る人もあったという。

「広島も原爆のとき、大変やったんやてなあ」

と、五十年前をきのこのように語りかける、お年寄り。

無表情な被災者が多いなかで、

「きょうの味は一生忘れへんで。いつかご恩がえしするさかいにな。やっぱりお好み焼きは広島のもんや。大阪は負けや」

と笑顔で話してくれた、おばさん。

悲惨な状況のなかにおいて、気を奮い立たせて人間としての品格をかるうじて保とうとしている多くの人びとの姿を、私は確かにこの目で見た。

家子新太郎さんは震災慰問の直後、愛知県豊橋市への転勤が決まった。親しい仲間たちと開いた送別会の席上、奥さんのひとみさんを伴って出席した彼は、お別れのあいさつをこう結んだ。

「定年になったのちも、僕は生まれ故郷の岩手県へ帰ろうという気持ちはありません。日本のどこかで、ひよっとしたら外国の町かもしれないかもしれませんが、住み心地のいいところへ住んで、災害や戦災にあつて困っている人たちのところへ飛んで行って、ボランティアとして彼らのために働きたいと思っています。そのために、体力とお金を蓄えることをこれからも心がけたいと思っています。九州や東京での在任はせいぜい二年でしたから、三年間過ごした広島は僕にとって第二の故郷ともいえる地です。この広島で、こうして教会関係者以外の人たち、みなさんのような温かい気持ちを持った人たちと出会えたことは、私の生涯の幸運だったと思っています。」

家子さんがこの宗教に帰依することとなつたきつかけは、彼にとって今思えば小さな出来事からだった。

岩手県湯田町の小学校を卒業した彼は、成績優秀な彼を親元から離すことで知力のみでなく、情操においても自立した人間に育てたいという両親の願いから、生家から二百キロ離れた宮城県仙台市の私立中学を受験することとなつた。

受験のため仙台市内の旅館に母子で泊まっていたときのこと。

山あいの生家を出て初めて訪れる大都会、仙台市の旅館で入学試験を翌日に控えて不安な表情を隠さない母子に、旅館の女将さんが二人の緊張を和らげるように声をかけてくれた。

「お二人の願いが叶うように、私と一緒に祈りませんか」

女将は近くのPL教会へ親子をともなつた。無事、その中学へ入学を果たした家子少年はこのとき体験した、それまでまったく未経験の「精神の世界」に強く興味をそそられた。早熟で多感な少年だったに違いない。

中学から大学卒業まで仙台市内での下宿生活を通した彼は、その間折りにふれて教会の扉に手をかけるようになる。彼はその都度、

「お帰りなさい」

の言葉に迎えられる。

大学を卒業した彼は品物や金のやりとりとは無縁の、ひたすら人の心と向かい合い、人のために祈ることを生涯の職として選んだ。旅館の女将との偶然の出会いが、彼のその後の人生の過半を方向づけることとなつた。

十二歳で生家を出たまま、少年の頃の夢そのままに日本国中を転々と暮らし、人のために祈りつつ晩年は異国で朽ちることもいとわれない家子さん。広島に生まれ育ち、広島を終（ついで）の場所と信じる私はたまたまこの地で彼と遭遇した。

彼と隣り合つて過ごしたおよそ十年の間、彼は私に示唆多い清新な風を送り続けてくれ、転地の先々で彼が出会つた人々の暮らしや、土地土地の風土をいとおしむように私に語ってくれた。そして私たちはともに震災の神戸へ。

家子さんと私はそこで華僑の一員でありながら、我々よりもっと日本人的な矜持を感じさせる歌手、李浩麗さんに出会つた。

国と国、人と人との境を超越する彼女の声曲は犠牲者への鎮魂の歌であり、廢墟の神戸で交差した多くの人々の出会いの讃歌のように聞こえた。

祖国の一都市が無残に崩壊したさなかの出来事は、ことさらに私の胸に染みいった。

夕暮れのなか神戸を後にした車中で、私は私の故国の来し方や、神戸で出会つた沢山の人の心奥にあるそれぞれの故郷のことを考え続けていた。

阪神淡路大震災から四年。復興の工事が今も進む神戸市の李浩麗さんから私のもとに一枚のCDが届いた。李浩麗さんのボーカルに、日本人の演奏者によるトランペットとキーボード、ギター、四人からなる音楽グループ「ラ・アルカント」による音楽CDである。CDのカバーに印刷されたタイトルは「ふるさと」。

あの日、神戸本山第三小学校の寒々とした校庭で聴いた「ふるさと」をはじめ、「四季の歌」「花」「夏の思い出」「里の秋」などの日本の唱歌とともに、中国の民謡「草原情歌」、「鳳陽花鼓」、中国青海省の民謡「在那遙遠地方」、沖縄の「花」など、地球全体を故郷とする華僑の一員にふさわしい選曲であった。

CDに添えた手紙のなかに李浩麗さんは、震災直後のことを回想してこう書いている。

《 私たちは外国人です。震災の慰問で被災地を回ったとき、中国の民謡や韓国の民族舞踊を果たして被災者の皆さんに受け入れてもらえるかどうかが一番心配していたことです。外国人の私たちが国々の民族衣装で踊ったり、歌ったりすることで、束の間でも皆さんに辛い思いを忘れていただきたい、と思いました。

ぜひ聴いて頂きたかったのは日本の童謡と唱歌でした。あの殺伐とした状況のなかで、人々にほんの少しでも安らぎを感じてもらえる音楽、それは童謡や唱歌だと私は思いました。そのとき自分に出来ることといえば、ただ精一杯歌うことだけでした。

演奏で回った避難所に住む人たちの人間模様がとても印象に残っています。ただだから貪欲に何でも持って帰ろうとする人。えげつない人もいれば、あの極限の状態のなかとは信じられない、鳥肌のたつような感激を与えてくださった人。予想もしない出来事にいくつも遭遇しました。人生すべての体験がわずか数ヶ月に凝縮したような、数え切れないほどの経験をさせていただきました。

ひとつ思ったのは、日本人のすぐれた国民性です。あの筆舌に尽くしがたい状況のなかでもよくも暴動なんか起きなかつたものだ。やっぱり、すごい、と思いました。

冷静で思慮深い多くの人たちに出会いました。ある小学校で滝廉太郎の「花」を歌った時のことです。学校を離れる間際、手に杖を持ったおじいさんが不自由な足で一生懸命私の方に歩み寄ってきて、私の手を握って話して下さいました。

「僕の妻も娘も共に二人、家の下敷きになって、僕の目の前で亡くなっていったんです。僕はよく妻と二人で地域のコーラス活動に参加していました。滝廉太郎の「花」は大好きな歌なんです。果たして僕はいつこの曲をまた歌えるんでしょうか。その日がまた来るんでしょうか。」

と冷静に語ってくださったことを今でも忘れることが出来ません。最後には「ありがとうございます。がんばりなさいよ」と私を励ましてくださって。励ましに伺ったのに、逆に私の方が励まされて胸が一杯になってしまつて、お返しする言葉がありませんでした。

日本という国、私は大好きです。今までの人生の半分以上を日本で過ごしているのですから。父によく言われるのが、「郷に入れば郷に従え」という言葉。よその国に住んでいる以上、その国の人たちと同じように賢沢に色々な物事を求めるべきではない。嫌いであれば、その国を離れるべきだ、と父に言い聞かされて育ちました。

思ったことをはっきり言わない日本人、イエスなのかノーなのかはっきり解らない日本語。一時期このことをとても疑問に思ったことがあります。思ったことをはっきり言うこと。そして、それを堂々と表現できる社会を築き上げてほしいと、今も思っています。

日本を尊敬する部分もたくさんあります。戦後わずか数十年で国際社会のなかで今のようないかなる地位を確立したこと。日本人がいかに「会社」という組織を大事に思い、重要視しているか。そしてきわめてよく働く。それも自分のためだけでなく、会社のために一生を捧げる人もいる。アジア、とりわけ東アジアの人からすれば信じられない発想です。良

いこともあって悪いことが見えてくるのだと思います。両方ひつくるめて、私は日本を愛しています。

華僑の商人が忘れることのない言葉があります。それは「衣錦還郷（イー チン ファン シャン）」という言葉です。日本の「故郷に錦を飾る」という言葉とまったく同じ意味です。私は『ふるさと』の歌詞のなかで三番のフレーズがとても好きなんです。

こころざしを果たして

いつの日にか帰らん

山は青きふるさと

水は清きふるさと

この歌詞を歌うとき、私はいつも李通坐おじさんのことを思います。二十歳で台南を離れて、初めての外国、日本をめざして東シナ海を渡るとき、通坐おじさんはきつと「衣錦還郷」の言葉を思ったことでしょう。故郷を離れたものでないと、故郷のありがたさを知ることができません。成功して帰る人、失意のなかに帰る人。故郷の自然はいつも同じ顔で温かく迎えてくれます。

私たち華僑は「浮葉」のごとく定まる場所がないと私は思います。私たちの社会には「落葉帰根（ルウオ イエ クウエイ クウン）」という言葉があります。繁る葉も落葉となり、やがて根に還るときがくる、という意味と私は理解しています。

国境を超えて生きる私たち。一体自分のお墓はどこに作ればいいの？ 日本の方には理解しにくいことも知れませんが、このことは私たちにとってはとても重要なことなのです。生まれ故郷ではあるが、誰もお墓参りもしてくれない地にお墓を作った方がよいのか。それとも本当の生まれ故郷ではないけれど、親しい皆の声が聞ける地にお墓を作った方がいいのか。とても迷うところです。

私には二つのふるさとがあると信じています。日本と台湾、神戸の町と台南の町。そこに住む人たち、山河。震災の時に『ふるさと』を歌いたいと思ったのはこんな私の思いからです。地震に遭った方すべてが神戸で生まれた人ばかりではない。でも、そこに居る人たちは、転勤先であったり、留学先であったり、移住してきたり、少なくとも神戸を何らかの形で故郷と想っている人たちばかりだと私は信じています。日本、そして神戸が、私にとって大切な大切な私のふるさとであるように。》

了